



TITLE:

膀胱後部平滑筋腫の1例

AUTHOR(S):

朴, 勺; 佐々木, 美晴; 花咲, 宏一; 中川, 隆; 森崎, 堅太郎

CITATION:

朴, 勺 ...[et al]. 膀胱後部平滑筋腫の1例. 泌尿器科紀要 1976, 22(8): 867-870

ISSUE DATE:

1976-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/122031>

RIGHT:

膀胱後部平滑筋腫の1例

北野病院泌尿器科（部長：中川 隆）

朴 勾
佐々木 美晴
花 咲 宏 一
中 川 隆

関西医科大学泌尿器科学教室（主任：新谷 浩）

森 崎 堅 太 郎

RETROVESICAL LEIOMYOMA: REPORT OF A CASE

Kyun PAK, Miharuru SASAKI,
Koichi HANASAKI and Takashi NAKAGAWA

From the Department of Urology, Kitano Hospital

(Chief: T. Nakagawa, M.D.)

Kentaro MORISAKI

From the Department of Urology, Kansai Medical School

(Chairman: Prof. H. Shintani, M.D.)

A case of retrovesical leiomyoma seen in a 45-year-old woman was presented. This is the sixth reported case of such condition in Japan. Thirty-five cases of retrovesical tumor could be collected from the recent Japanese literature.

はじめに

膀胱後腔において特定臓器と無関係に発生する腫瘍は膀胱後部腫瘍とよばれ、独立した疾患として扱われている。著者は膀胱後部に原発した平滑筋腫の1例を経験したので報告する。

症 例

患者：平○富○子，45歳，女子，主婦。

主訴：血尿および異常性器出血。

家族歴：特記することなし。

既往歴：15歳のとき虫垂切除術。2児正常分娩。人工妊娠中絶1回。

現病歴：1972年11月異常性器出血をきたし，婦人科医受診するも異常なしといわれた。1973年11月，血尿および異常性器出血をきたし，同婦人科医受診。婦人科的には異常はないが，内診にて膀胱周囲に腫瘤を触れると指摘され，当科に紹介された。異常性器出血は

それぞれ3～4日間続いた。頻尿，排尿痛，残尿感，排尿困難をきたしたことはなく，排便は1日1回，食欲は良で体重減少もないという。

現症：体格中等。栄養良。頸部および腋窩リンパ節は触れず。胸部に打聴診上とくに異常を認めない。両腎は触れず。鼠径リンパ節の腫大は認められない。経腔的雙手診にて，腔前壁の尿道後部から膀胱左側壁にかけて，超鶏卵大で，表面は平滑，弾性軟，可動性ある腫瘤を触知。圧痛は認められなかった。

諸検査成績：尿；蛋白（±），糖（-），ウロビリノーゲン（正），赤血球（-），白血球（++），上皮細胞（±），グラム陰性桿菌（+）。血液一般；赤血球数 417×10^4 ，Hb 13.6 g/dl，Ht 42%，白血球数 5000，分類にて左方推移がみられる。血液生化学；黄疸指数 9 総蛋白 7.2 g/dl，A/G 1.77，GOT 19，GPT 20，LDH 215，Alk-P 3.4 KAU，acid P 3.1 KAU，BUN 15 mg/dl，creatinine 0.7 mg/dl，Na 139 mEq/L，K 4.3 mEq/L，Ca 4.7 mEq/L，Cl 99 mEq/L。赤沈 7 mm/60分。

梅毒血清反応（－），検便にて潜血（－），PSP 試験 15分値10%，2時間総値70%。EKG 正常。胸部レ線像に異常所見なし。

レ線検査：KUB, IVP にて異常なし。膀胱造影をおこなうと，右前斜方向像にて左膀胱部に半球状の陰

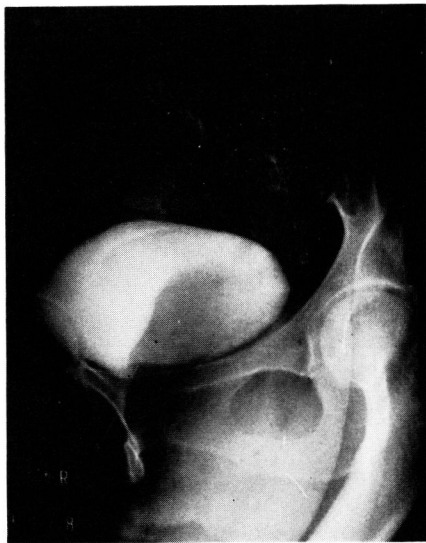


Fig. 1. 膀胱造影

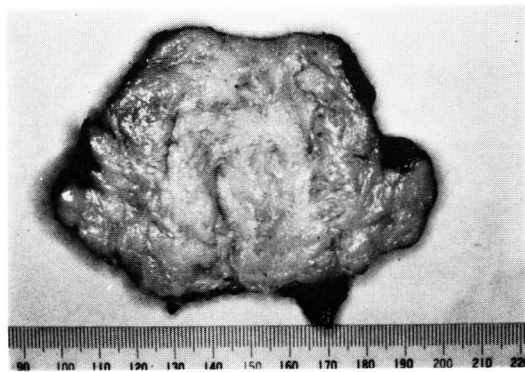


Fig. 2. 摘出標本

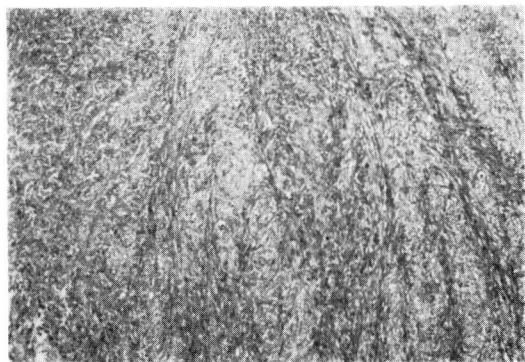


Fig. 3. 組織像

影欠損がみられた (Fig. 1)。注腸透視にて異常なし。

膀胱鏡検査：膀胱鏡は容易に挿入可能で，容量は150 ml 以上。膀胱粘膜に異常を認めないが，左側壁が軽度膀胱内に突出していた。

以上の検査結果より，膀胱後部腫瘍の診断のもとに1974年2月6日，硬膜外麻酔にて手術を施行した。

手術所見：臍下部より恥骨に達する下腹部正中切開にて，腹膜外的に膀胱に至り，膀胱の左側後方に超鶏卵大の腫瘍がその内側の一部にて膀胱に癒着しているのを認めた。脛，子宮との関係を見るため，腹膜をひらいた。膀胱後壁，子宮前壁，脛との癒着はなかった。膀胱高位切開をおこなうことにより，尿道と腫瘍の癒着がないことを確認するとともに，癒着部膀胱壁を損傷することなく，腫瘍を摘出した。

摘出標本：7.0×5.0×3.0 cm の大きさで，重量は80 g。黄白色で硬結部なく，弾性軟。断面は黄白色の充実性組織でみたされていて，出血部や壊死部を認めなかった (Fig. 2)。

組織検査：桿状の核を有する紡錘形細胞が束状となって増生し，たがいに不規則に交錯している。核異型および分裂像はほとんどみられない (Fig. 3, 4)。平滑筋腫と考えられる。膀胱との癒着部を組織学的に調べ

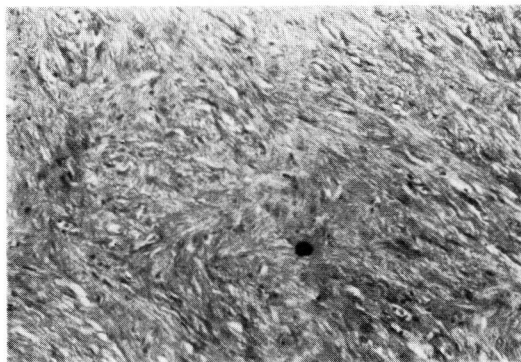


Fig. 4. 組織像

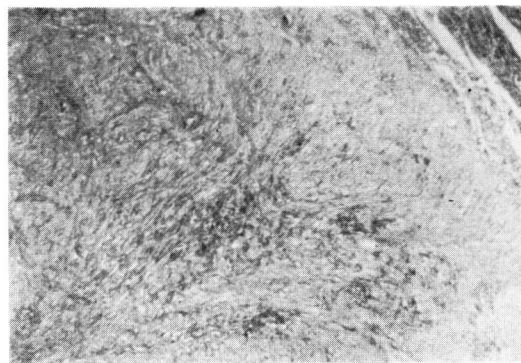


Fig. 5. 組織像

Table 1. 本邦における膀胱後部平滑筋腫症例

症例	報告年度	年齢	性	症 状	治 療 法	重量(g)	報告者	文献番号
1	1964	61	男	排 尿 困 難	腫 瘍 摘 出	245	武田ら	8
2	1968	56	男	尿 閉	腫瘍摘出, 人工肛門造設	850	井上ら	19
3	1971	38	男	排便時腫瘍, 脱出	腫 瘍 摘 出	85	黒田ら	22
4	1974	60	男	血 尿, 排 尿 困 難	腫 瘍 摘 出	285	三好ら	34
5	1974	52	男	排 尿, 排 便 困 難	腫瘍摘出, 膀胱全摘 両側尿管皮膚瘻造設	310	中村ら	29
6	1974	45	女	血尿, 異常性器出血	腫 瘍 摘 出	80	自験例	

ると、腫瘍は被膜に被覆されており、膀胱とは無関係であることが判明した (Fig. 5)。

術後経過：術後経過順調にて、創は一次治癒し、術後15日目に退院した。

考 察

Young^{1,2)} は1926年膀胱後腔に原発する肉腫を retrovesical sarcoma と命名し、腫瘍を精囊および前立腺との関係に重点をおいて、かれの経験した症例を詳細に論じている。本邦における retrovesical sarcoma の集計には、高安ら³¹⁾、酒井ら¹¹⁾、三品ら²¹⁾のように膀胱後部臓器の相違のため女性例を除外している。一方、山下ら³²⁾、南ら⁵⁾の報告にみられるように、女性においても膀胱後腔で特定臓器と無関係に発生する肉腫は当然存在するはずである。しかし、膀胱後部肉腫はその定義・分類にあたって精囊との関係が重視されているため、あたかも男子についてのみ存在する疾患のように扱われる傾向があり、女子例は統計から除外されているので実態はつかみえない状況である。

1963年山田³³⁾は膀胱後部腫瘍の集計をとり、37例を報告している。その後、われわれが集めた本邦における膀胱後部腫瘍の報告例は35例で、山田の報告例を加えると72例となる。われわれが集めた35例について簡単に考察を加えると、悪性22例、良性13例で、悪性のものでは、平滑筋肉腫5例（松本ら²⁷⁾、武田ら⁸⁾、姉崎ら⁵⁾、猪野毛ら¹²⁾、三品ら²¹⁾、横紋筋肉腫4例（千葉ら³⁾、南ら⁶⁾、重松ら¹⁸⁾、石堂ら²⁰⁾）、細網肉腫3例（福嶋ら²³⁾、武田ら⁷⁾、酒井ら¹¹⁾）、線維肉腫2例（大北ら¹⁴⁾、ス波ら¹³⁾）、小円形細胞肉腫1例（大北ら¹⁴⁾）、リンパ肉腫1例（高安ら³¹⁾）、紡錘形細胞肉腫1例（国島ら¹⁰⁾）、腺癌1例（三谷ら²⁶⁾）、単純癌1例（大北ら¹⁴⁾）、neuroblastoma 1例（石田ら¹⁶⁾）、malignant teratoma 1例（甲野ら²⁴⁾）、未分化細胞肉腫1例（安食ら³³⁾）である。良性のものでは平滑筋腫6例（武田ら⁸⁾、井上ら¹⁹⁾、黒田ら²²⁾、三好ら³⁴⁾、中村ら²⁹⁾、著者）、神経鞘腫2例（清水ら⁴⁾、神谷ら¹⁷⁾）、

線維腫2例（三原ら⁹⁾、三好ら³⁴⁾）、血管筋腫1例（小坂ら²⁸⁾）、血管内皮腫1例（武田ら¹⁵⁾）、mesenchymoma 1例（大森²⁵⁾）である。

膀胱後部平滑筋腫は山田の集計にはなく、著者の報告が本邦第6例目である (Table 1)。

膀胱を後方から圧迫して、膀胱に関連した臨床症状を呈する骨盤内腫瘍には、直腸腫瘍、子宮腫瘍、骨盤より発生する骨髄腫および転移性腫瘍など原発臓器の明らかなものも多く、これらのものではそれぞれ原発臓器特有の症状があり、早期に診断されることが多い。膀胱後腔において特定臓器と無関係に発生する膀胱腫瘍は発生部位の性格上、かなり腫瘍が成長してから初めて膀胱に関連した臨床症状を呈することが多い。症状として、排尿困難、下腹部腫瘍、頻尿、尿閉、排尿痛、無尿、下腹部痛、便秘、排便困難などがあげられる²¹⁾。

われわれの症例は女子例であり、症状は血尿、異常性器出血であった。初診時、検尿にて赤血球、白血球を多数認めたが、膀胱鏡検査にて、膀胱粘膜全体に軽度の発赤を認めるのみで、投薬にてすぐ尿所見が改善されたことから、膀胱炎を合併していたと考えられる。異常性器出血と腫瘍との関係であるが、婦人科的に異常なく、腫瘍は女性性器と無関係に存在していたので、異常性器出血の原因は不明である。

ま と め

45歳女性にみられた膀胱後部平滑筋腫の1例を報告した。本症例は本邦第6例目にあたる。また山田の報告以後の35例の膀胱後部腫瘍の統計的観察を試みた。

本論文の要旨は第67回日本泌尿器科学会関西地方会において報告した。

文 献

- 1) Young, H. H.: Young's Practice of Urology, Vol. I, W. B. Saunders Co., Philadelphia, 1926.
- 2) Young, H. H.: Cabot's Modern Urology, Vol.

- I, 911, Lea & Febiger, Philadelphia, 1936.
- 3) 千葉栄一・ほか：日泌尿会誌, **57**：309, 1966.
 - 4) 清水光博・ほか：日泌尿会誌, **54**：95, 1963.
 - 5) 姉崎 衛・ほか：日泌尿会誌, **58**：132, 1967.
 - 6) 南 武・ほか：泌尿紀要, **10**：708, 1964.
 - 7) 武田正雄・ほか：日泌尿会誌, **55**：508, 1964.
 - 8) 武田祐寿・ほか：日泌尿会誌, **55**：502, 1964.
 - 9) 三原 謙・ほか：皮と泌, **27**：409, 1965.
 - 10) 国島起嗣夫・ほか：日泌尿会誌, **59**：539, 1968.
 - 11) 酒井 晃・ほか：臨泌, **23**：217, 1969.
 - 12) 猪野毛健男・ほか：日泌尿会誌, **58**：359, 1967.
 - 13) 斯波光生・ほか：日泌尿会誌, **58**：356, 1967.
 - 14) 大北健逸・ほか：日泌尿会誌, **58**：888, 1967.
 - 15) 武田正雄・ほか：日泌尿会誌, **58**：894, 1967.
 - 16) 石田晃二・ほか：日泌尿会誌, **59**：741, 1968.
 - 17) 神谷 斉・ほか：日泌尿会誌, **58**：774, 1967.
 - 18) 重松俊明・ほか：日小外会誌, **5**：373, 1969.
 - 19) 井上堯司・ほか：日泌尿会誌, **60**：352, 1969.
 - 20) 石堂哲郎・ほか：日泌尿会誌, **61**：516, 1970.
 - 21) 三品輝男・ほか：泌尿紀要, **15**：854, 1969.
 - 22) 黒田清輝・ほか：日泌尿会誌, **62**：657, 1971.
 - 23) 福嶋藤平・ほか：日医放会誌, **32**：769, 1972.
 - 24) 甲野三郎・ほか：日泌尿会誌, **62**：911, 1971.
 - 25) 大森弘之・ほか：日泌尿会誌, **62**：571, 1971.
 - 26) 三谷玄悟・ほか：日泌尿会誌, **64**：357, 1973.
 - 27) 松本鐸一・ほか：日泌尿会誌, **56**：1149, 1965.
 - 28) 小坂哲志・ほか：日泌尿会誌, **63**：292, 1972.
 - 29) 中村 章・ほか：日泌尿会誌, **65**：68, 1974.
 - 30) 山田瑞穂：臨床皮泌, **17**：397, 1963.
 - 31) 高安久雄・ほか：癌の臨床, **10**：120, 1964.
 - 32) 山下源太郎・ほか：日泌尿会誌, **53**：361, 1962.
 - 33) 安食悟朗・ほか：日泌尿会誌, **65**, 63, 1974.
 - 34) 三好信行・ほか：西日泌尿, **36**：590, 1974.

(1976年7月5日受付)